

乳頭再建におけるマイクロサージェリーの位置付け

The positioning of microsurgery for papilla reconstruction techniques



安斉 昌照

Masateru Anzai

(医) OHP あんざい歯科医院

ANZAI Dental Office

審美歯科において歯冠形態の左右非対称性や、歯間乳頭の高さの不揃い、さらに歯頸線の不揃いなど、我々歯科医師と患者間での審美観の違いがあると報告されている。そのため、患者の審美感が、我々歯科医師が感じているよりも劣る場合があり、多少歯肉の不揃いが生じていても許容されることがある。しかし、ブラックトライアングルの出現によってその審美性は大きく失われてしまう。そこで昨今、そのブラックトライアングルを改善するために様々な歯間乳頭再建における術式が報告されている。歯間乳頭の形態は、隣接する歯冠形態に依存しており、例えばトライアングラー型の歯冠形態では、コンタクトポイントが歯冠側に存在するため、歯間乳頭は高く、スクエア型であれば低く表現される。さらに、歯間乳頭は、歯根間距離や骨頂 - コンタクトポイント間距離、さらに歯周組織フェノタイプには相関があり、失われた歯間乳頭部の周囲の組織・形態がどのような状態であるかを判断することで、様々な要因によって失われた歯間乳頭を改善することができる可能性がある。しかし、連続した歯間乳頭の欠損を改善させる術式の報告は限定的であり、非常に困難を極めることが予想される。そのため、歯間乳頭直下の軟組織増大を目的とした、コラーゲン繊維の豊富な上顎結節から採取された結合組織移植とともに、複数歯の歯間乳頭と歯肉弁全体を歯冠側へ挙上することで、一気に歯間乳頭を再建することが可能である。そのため、VISTA (Vestibular Incision Subperiosteal Tunnel Access) テクニックのように歯肉弁全体を牽引・維持できる縫合を行う術式が望ましいと考えられる。さらに、歯間乳頭は血流の乏しく、繊細な組織であるため、切開・剥離、減張切開、さらに縫合などの歯肉弁のマネジメントがとても重要である。例えば、歯間乳頭への血流を阻害しないような角化歯肉内への切開や、剥離子を用いて歯間乳頭直下の剥離、獲得したい歯間乳頭の高さまで歯肉弁を歯冠側に移動できるまでの減張量の獲得、さらに低侵襲な歯肉弁の縫合を可能にするために 7-0, 8-0 での縫合など、繊細な手技が要求されるため、顕微鏡を用いた拡大視野における手術は歯間乳頭再建を成功させる上で非常に重要である。今回は、歯間乳頭再建におけるマイクロスコープを用いた様々な外科的アプローチの一つ一つに焦点を当てて動画を供覧しながら解説していきたい。

【略歴】

2001 年 日本歯科大学歯学部 入学
2007 年 日本歯科大学歯学部 卒業
2008 年～ 2010 年 日本歯科大学附属病院歯科麻酔・全身管理科入局
2011 年～ あんざい歯科医院勤務
2015 年 神奈川歯科大学社会人大学院 咀嚼機能制御補綴学分野 入学
2016 年～ あんざい歯科医院 院長
2018 年～ 医療法人社団 OHP あんざい歯科医院 理事長
2020 年 神奈川歯科大学社会人大学院 咀嚼機能制御補綴学分野 卒業 歯学博士
2025 年 医療法人社団 OHP OHP DENTAL OFFICE 開設

【所属】

神奈川歯科大学歯科補綴学講座 クラウンブリッジ補綴学講座 特任講師

日本顕微鏡歯科学会 認定医

日本顎咬合学会 認定医

日本口腔インプラント学会 会員

日本歯周病学会 会員

日本臨床歯周病学会 会員

医療法人社団 OHP あんざい歯科医院 理事長

In interdental papilla reconstruction, the management of the flap is very important. For example, precision techniques are required, such as incision into the flap that does not obstruction of blood supply to the interdental papilla, dissection just underneath the interdental papilla using a micro-periosteum elevator, obtaining the flap extension until the gingiva can be moved coronally to the desired height of the interdental papilla, and suturing at 7-0 or 8-0 to allow minimally invasive suturing of the flap. Therefore, surgery under a microscope with a magnified field of view is very important for successful interdental papillary reconstruction. In this time, I would like to show a novel approach and lecture that it focusses on each of the various surgical approaches and provide explanations with video clips.

BIO

The Chairman of OHP medical corporation.

Part-time lecturer for department of prosthodontics in Kanagawa Dental University.

DDS from The Nippon Dental University.

Ph.D from Kanagawa Dental University.

Accredit member of Japan association of microscopic dentistry

Accredit member of The academy of clinical dentistry

Member of Japanese society of oral implantology

Member of Japanese society of periodontology

Member of The Japanese academy of clinical periodontology
